



刻む編 上

日の東京デプリイトポールの代表は「まず勝」の目標を、最終戦で達成した。チーム最年少で競技選手21が涙を流した。「家族みんなこのチームで戦うのが幸せだ」と思いこむ。3年前に結成された同大のサクルが母体の代表チームは、手話主体のうちの選手と音盲の者の難題を、聴者のタッグ、手話通訳者が支え合って大会に臨んだ。しかし「多様性」がゆえの困難が、チームに立ちこめただけでもない。

サークルが母体の代表チームは、手話主体のろうの選手と音声主体の難聴の選手、聴者のスタッフ、手話通訳者が支え合って大会に臨んだ。しかし「多様性」がゆえの困難が、チームに立ちばたかったともある。

ともあふ

過去の大会では他競技で
聴者の指導者としての選手と
の摩擦や、選手を使うか使わ
ないかでの手間の分断が起
きた例がある。筑波技術大の
元教員でハンド代表に当初か
ら関わった中村有紀チームリ
ーダー(48)が明かす。「うち
も分裂寸前になり、ヒヤッと
したことはあった」
トライアウトで選手がそろ

ハンドボール男子代表



●最終戦でケニアの攻撃を阻む林遼哉選手(右から2人目) ●世界初勝利の目標を達成したハンドボール男子日本代表の選手とスタッフ=いずれも東京・駒沢屋内球技場で



聴覚障害者の国際スポンツ大会、東京デフリビエにては、筑波技術大の佐々木と、卒業生の選手計17人が世界に挑んだ。聴覚障害者のあひだ大の学生たちは開閉会式で出陣したほか、100人超の選手がトースタツとナリ、大会を盛り上げた。誰もが輝ける社会を自指し、聞えない・聞こえない若者たちが、大会を通して私たちの心に刻み込まれた。

(一)の連載は、大野孝志が担当します。

が近づいた合宿での大浴場
で、手話を使うかどうか関係
なく、選手たちが会話してい
て感動した」という。「まず
はスポーツを楽しむ心で、選
手や指導者が相手に歩み寄る
ことが欠かせないと思ってい
ます」

障害「プレゼン」で理解

「一つの魔法なかった」

「少し聞こえる難聴の選手を、スタッフが優遇しているのでは」「短くシンプルに指導してもらわないと分からない」

中村さんは「ハイレベルな指導者が入り、強化色が急に強まった頃だった。選手の間には競技の優先度に違いもあり、不満につながったのでは」と振り返る。

試合終了直後に涙する小林優太
主将とねぎらう亀井良和監督



中屋教授は「補聴器をつけるかどうか聞こえるのか」など、聴覚障害を解説。「他に話をしたい人は？」と選手らに呼

「工人内耳でも、すべて聞こえるわけではない」「自分自身が難聴だが、補聴器外している時は、ほとんど聞こえていない」などと打ち明けた。

中居孝次は大会後、二ヶーションを以て取りつゝ、一意識がでた。その日の牛の練習では、雰囲気が少し良くなった。感じた通り、もう聞いてゐる」と振り返つた。

「この者と、の会合や指導では手話がいつぱい、声で話せる時やうなひつぱりではなかつた」

亀井良重(31)は夏以降、手話を多用するようになった。チー・カミとめたな、意を問われ、こゝで、一意識を強固にする意識が、少し大切だ。自分自身と違ふ普通、あるところ、理解が選手間でも深まつた。

一つの魔法は、なかつた。

小林健太(24)は、大会



が近づいた台座前の大浴場
で、手紙を使つてかちか関係
なく、選手たちが会話して
感動した」といふ。「まず
はスポーツを楽しむで、選
手と指導者が相手に歩み寄
ることが欠かせないと思いま
す」



聴覚障害者の国際スポーツ大会「東京デフリンピック」では、筑波技術大の在学学生と卒業生の選手計17人が世界に挑んだ。聴覚障害のある同大

do not. is not. 輝沙

を道じて私たちの心に刻んだ
こととは？

（この連載は大野孝志が担当
します）